腹部超音波検査	S009
	担当部署
腹部エコー	生理

検査オーダー

患者同意に関する要求事項		該当なし
オーダリング手順	1	電子カルテ→指示①→生理→腹部エコー→腹部エコー
	2	
	3	
	4	
	5	
検査に影響する臨床情報		1)超音波の物理的要因 超音波の基礎理論は難解であり、日常検査を行ううえでかならずしもすべてを理解していなくても検査を行うことは可能である。しかし、虚像の発生など基本的な知識については知っておかないと判読を進めていくことが困難となる。 2)解剖学的要因 超音波検査は多方向から断層像を得るため、立体的な解剖学の知識、正常変位、個人差による画像の変化、骨や消化管ガスによる障害などについて理解していないと、得られた画像を判読していくことが困難である。
検査受付時間		8：45～17：30

検体採取・搬送・保存

患者の事前準備事項	1）検査の前は絶食にする。食事の摂取は、胃内への食物の貯留、消化管ガスの増加、胆嚢の収縮を生じさせて検査に悪影響がみられる。やむを得ず食後に検査をすることになった場合には報告書に記載する（例：胆嚢収縮（食後 1 時間後のため）等） 2）検査前に水やお茶の飲水は多くの場合に可能だが、牛乳などの脂肪質は胆嚢を収縮させるため禁止する。 3）腹部超音波検査は胃内視鏡検査や胃・腸 X 線透視検査の前に施行するようにする。 4）腹部を露出してもらい、安静仰臥位。基本は仰臥位で検査施行。必要に応じて側臥位、伏臥位、座位
検体採取の特別なタイミング	該当なし

検体の種類		採取管名	内容物	採取量	単位
1	人体(腹部領域)	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし

2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					

検体搬送条件	ベッド可能
検体受入不可基準	1)体動が激しく安静を保つことができない患者 2)検査に同意を得られない患者 3)閉所恐怖症、暗所恐怖症の患者(ドアを開放しての測定や室内灯を点けて検査を実施出来る場合は報告書にその旨を記載する) 4)身体的な理由によりエコーゼリーの付着やプローブの接触が困難な患者（可能であれば他の位置から検査を施行する。その旨レポートに記載すること）
保管検体の保存期間	特記事項なし

検査結果・報告

検査室の所在地	病院棟 3 階　中央検査部
測定時間	半日(診察前：1 時間)
生物学的基準範囲	[肝臓の生物学的基準範囲] 成人の肝サイズの目安は以下の通り。ただし、体格を考慮する。左葉　100×60 ㎜以下、右葉(厚み)では男性 130 ㎜以下、女性 120 ㎜以下。腫瘤性病変を認めない。 [胆嚢の生物学的基準範囲] 大きさは長径 60～80 ㎜、短径 20～30 ㎜となる。内腔は無エコーとなる。壁の厚さは 3 ㎜未満である。 [胆管の生物学的基準範囲] 区域枝で 1 ㎜程で、左右肝管は 3 ㎜程、肝外胆管は上限 7 ㎜程である。内腔は無エコーである。 [膵臓の生物学的基準範囲] 膵臓の大きさは頭部が 20～25 ㎜程、体部が 15～20 ㎜程、尾部が 15～20 ㎜程となる。形状は扁平を呈する。実質は比較的均一である。主膵管の径は 3 ㎜以下で平滑な管腔構造を呈している。 [脾臓の生物学的基準範囲] 脾の大きさは、千葉式で脾門部から下極までの距離(a)㎝×脾門部での厚み(b)㎝≦20㎠ [腎臓の生物学的基準範囲]

	大きさの目安は長径 90～110 ㎜で、左腎のほうが右腎よりやや大きい傾向にある。 [消化管の生物学的基準範囲] 虫垂の最大外径で 6 ㎜以下である。消化管の壁の厚みは、蠕動運動や内容物による伸展および虚脱時により異なる。評価には、内腔の状態や壁構造を加味しなければならず、単にカットオフ値が何㎜というのは難しい。このため、便宜的な表現の正常値は、胃壁は 5 ㎜以下、小腸で 4 ㎜以下、大腸で 3 ㎜以下を目安にしている。壁の特徴は、小腸でピアノ鍵盤に類似する Kerckring 壁がみられ、結腸には半月状のハウストラが描出される。
臨床判断値	該当なし

基準値				単位	特記事項なし
共通低値	共通高値	男性低値	男性高値	女性低値	女性高値
特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし

パニック値	高値	該当なし
	低値	該当なし
生理的変動要因		1）検査の前は絶食にする。食事の摂取は、胃内への食物の貯留、消化管ガスの増加、胆嚢の収縮を生じさせて検査に悪影響がみられる。 2）検査前に水やお茶の飲水は多くの場合に可能だが、牛乳などの脂肪質は胆嚢を収縮させるため禁止する。
臨床的意義		腹部疾患を対象にする実際の検査となる。このため、被検者から腹部症状を聞き取れる能力、知識として腹部各臓器の解剖・各種の疾患・血液生化学検査の成績値、超音波像、経験まで幅広く求められる。得られた検査の情報から想定される疾患と否定される疾患を推察し、超音波像の判読を進める。腹部領域の検査は、他領域と異なって多くの臓器が関連した変化を生じる。